

# H6エリアタンクからの水の漏えいについて

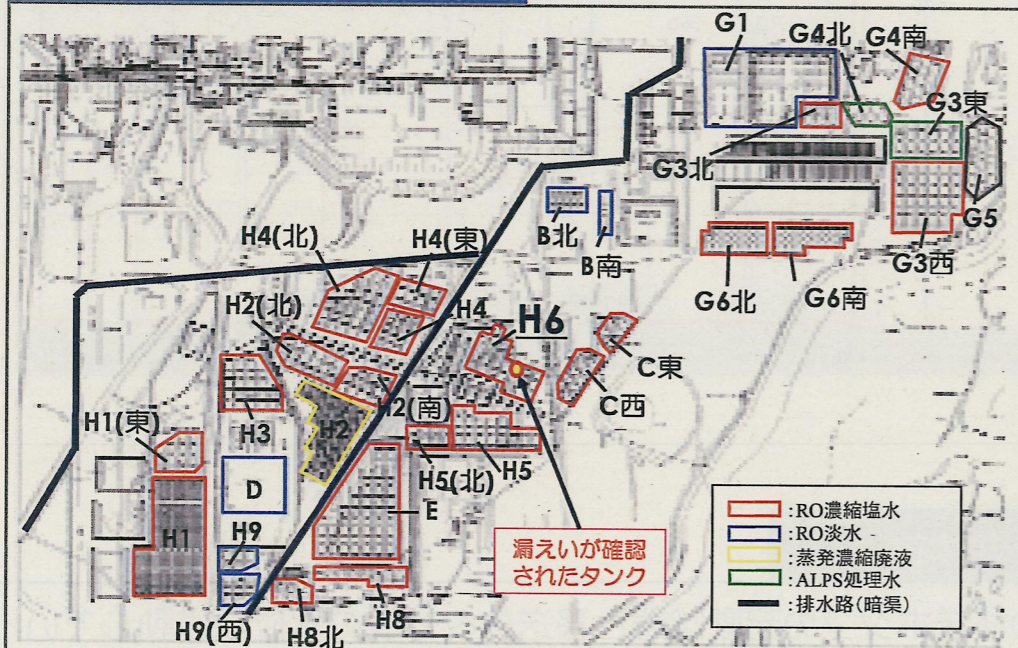
平成26年2月  
東京電力株式会社

資料2-3

平成26年2月19日に、H6エリアのタンクから、約100m<sup>3</sup>の高濃度の汚染水がタンク上部の天板部より雨どいを伝い、タンクの堰の外部に漏えいしました。原因は現在調査中です。既に漏えいは停止しており、近くに排水路がないことから、海への流出はないと考えています。

## (I) 漏えいの概要

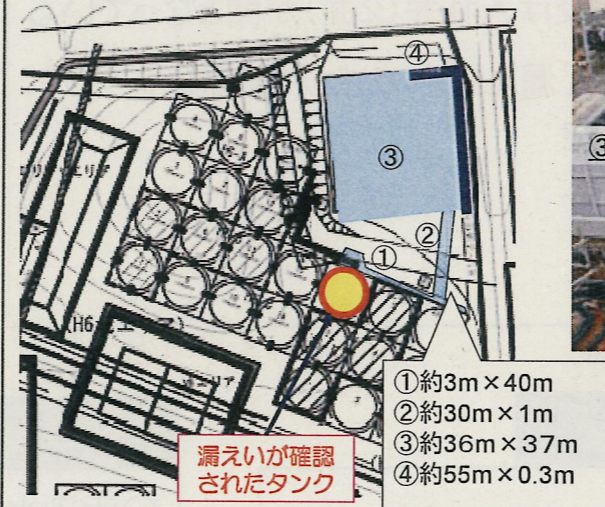
### 漏えいが確認されたエリア



- H6エリアのタンク（1基）から漏えいしました。
- 近傍に排水路がないこと、直近の排水路は暗渠化されていることから、海への流出はないと考えます。

### 漏えいの範囲・状況

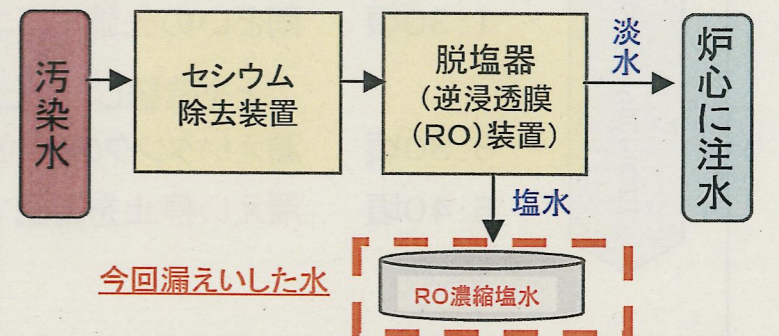
#### H6エリア拡大図



- H6エリアのタンク堰の外に、約100m<sup>3</sup>の水が漏えいしました。

### 漏えいした水

#### 【汚染水処理の主要工程】



- 今回漏えいしたH6タンクには、「RO濃縮塩水」が保管されています。

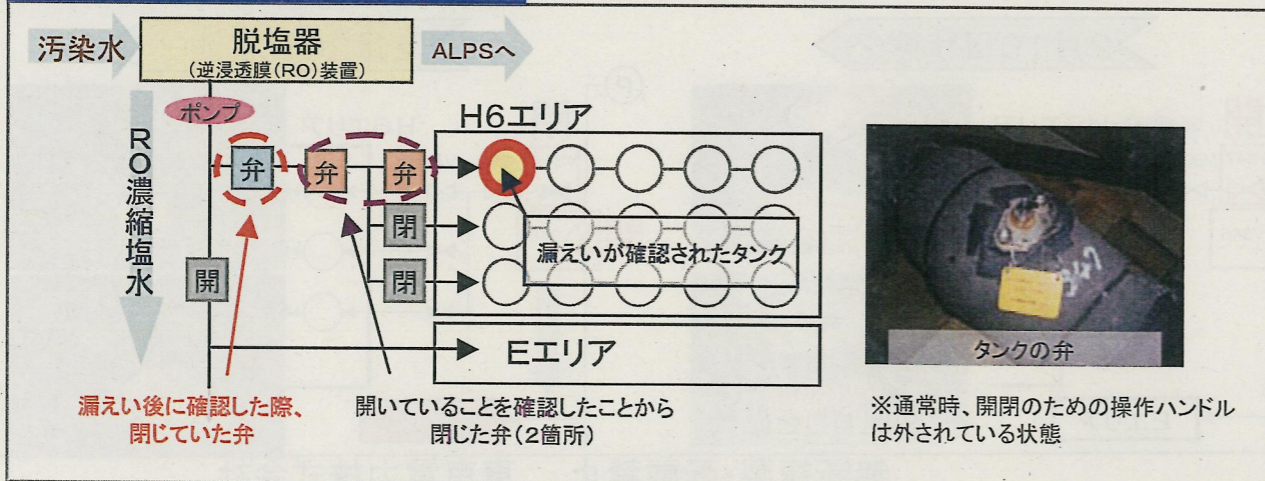
- 漏えい水の放射能濃度は以下の通りです。

【H6エリア漏えいタンク雨樋水サンプリング結果】  
 <採取日:平成26年2月20日、単位:ベクレル/リットル>  
 ・セシウム134 : 3,800  
 ・セシウム137 : 9,300  
 ・全ベータ : 2億3千万  
 ※表面線量率:毎時50ミリシーベルト(ベータ線)

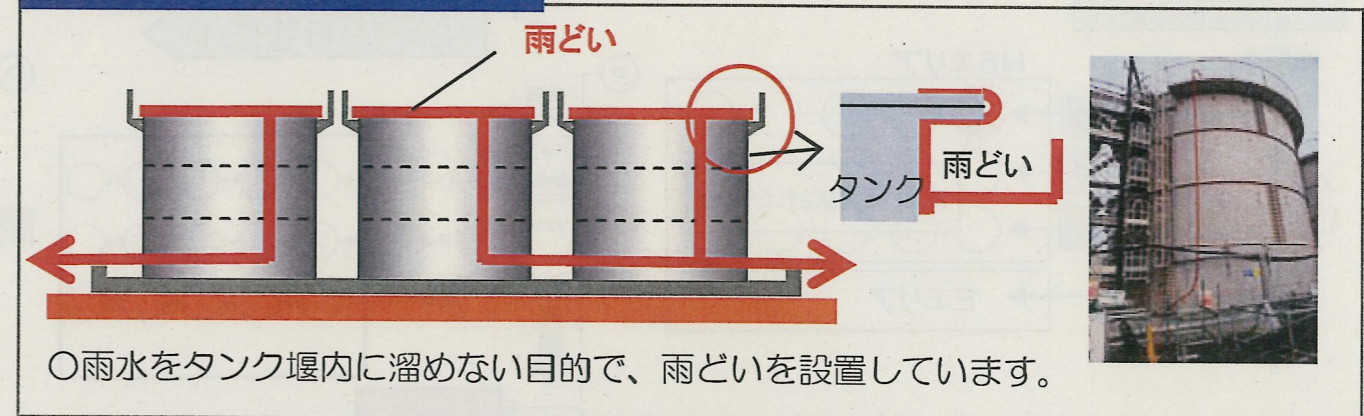
## (II) 漏えいの原因(現場の確認状況)

- H6エリアとは別のエリア(Eエリア)にRO濃縮塩水を移送すべきところ、既に満水であったH6エリアの当該タンクに移送されてしまいました。
- そのため、タンク上部の天板部より水が溢れ出してしまいました。
- さらに、上部より溢れた水は、雨水対策として設置してある雨どいを通じてタンク堰外に流出してしまいました。

### 移送配管の概略



### 雨どい

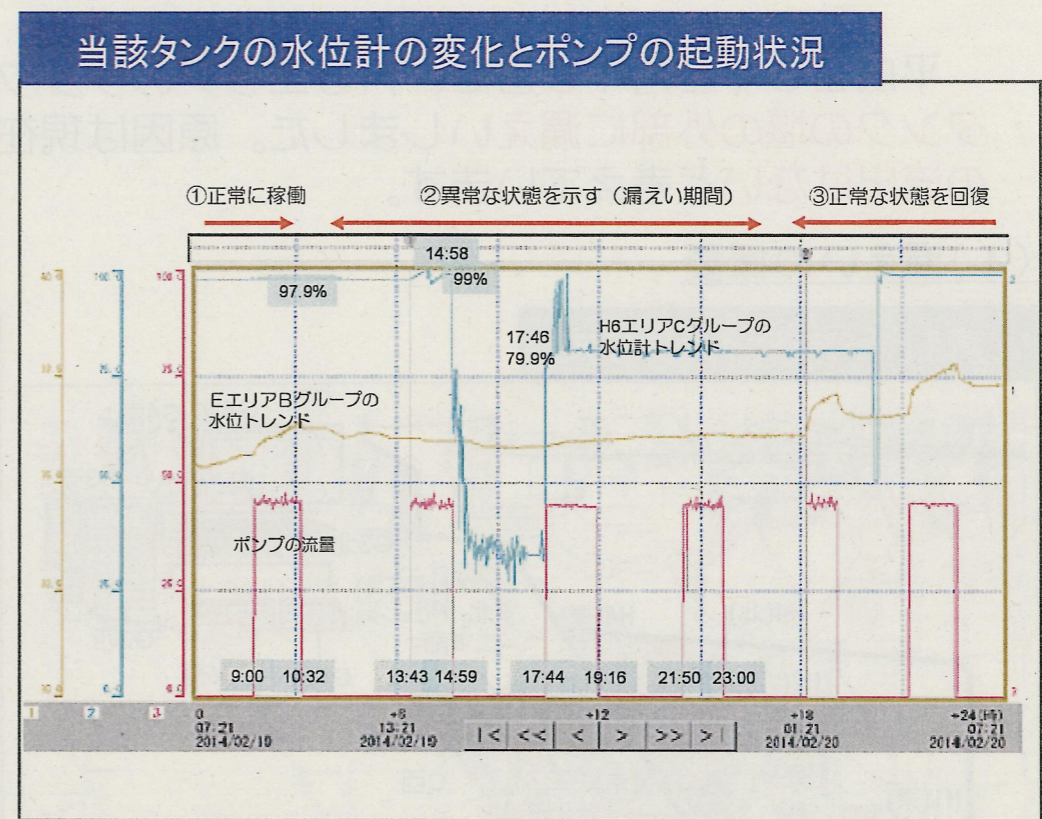


- 雨水をタンク堰内に溜めない目的で、雨どいを設置しています。



(Ⅲ) 発見の経緯と初期対応

時系列	
H26年2月19日	・14:01 当該貯槽タンク 水位警報(98.9%)発生
	・14:05 移送・点検等の実施が無いこと等から、計器のトラブルと判断
	・15:00 臨時でパトロール実施も、異常は確認されず(地上より確認)
	・16:00 定例パトロール実施も、異常は確認されず(地上より確認)
H26年2月20日	・23:25頃 定例パトロールにおいて、当該タンク上部より水が垂れていることを発見
	・ 0:30 天板まで水位があること、雨どいを通して堰外へ流出している事を確認
	・ 1:30頃 雨どいの先端にビニール養生を実施。受け入れ弁(2弁)が開となっていることを確認したことから、閉操作を実施。漏えい水の減少を確認。
	・ 3:30頃 漏えいタンクの水位を下げる操作を実施
	・ 5:40頃 漏えい停止を確認



(Ⅳ) 短期的な対策

- 汚染水・土壌の回収**
- 漏えい水の回収および、漏えい箇所の土壌回収を開始。
  - 2月21日までに漏えい水約100 m<sup>3</sup>のうち、約42 m<sup>3</sup>を回収済み。
- 同様の弁の確認**
- H、G、J1エリアの弁100箇所を点検し、全て閉じていることを確認済み。

(Ⅴ) 再発防止策

- 反省事項**
- 水位計の警報発生に伴い、実水位の確認を行うべきであった。
  - ポンプの起動状況と受け入れタンクの水位変化から異常の兆候を早期に発見し、対応すべきであった。

- 今後の対応**
- 汚染水の移送ポンプの起動状態と移送先タンクの水位が連動していることを1時間程度毎に監視。(異常時には、現場にて弁の開閉状態・移送ラインの構成を確認)
  - タンクの「水位が高い」警報が出た場合には、現場にてタンク天板から水位を確認し、異常の有無を確認。
  - 当面、通常パトロール(4回/日)に加え、現場パトロールを強化。
  - 漏えい水・土壌の回収継続、観測孔設置による監視等を実施。

(Ⅵ) 原因究明の継続(弁の開閉について)

